

雨の名 風の名

俳人 宇多 喜代子

初冬のある日、数人の仲間と奈良県の山村を歩いていたとき、それまでの好天が一転してにわか雨となった。向かいの山には日が照っているのに、その雨は少し待てば止む「しぐれ」だとわかる。近くの農家の軒下を借りて、しばらくの雨宿りをさせてもらったのだが、雨があがつて歩きはじめたとき、仲間の一人が「少しの時を過ぎてゆく雨」を「時雨」と書いた最初の人って、すぐれた気象予報士だったと思うね。」と言った。すると、「夏の夕方に降る『夕立』だってそうだよ。」と誰かが言い、ただの雨が、季節や降りようによって、いくつもの名を変え、ることに話が及んだ。

そんな話を耳にしながら、私が中学生のころ、祖母が、たまたま道で出会った呉服店の店員さんに「地はねずみで、それに雨を降らせてください。ニビイロにしたいのだけれど、ギンネズにしましょう。雨も夕立では派手だろうから、春雨くらいがいいかもしれない。」と、着物の色柄を注文しているのを不思議な思いで聞いたことを思い出した。

「ニビイロ」「ギンネズ」が「鈍色」「銀鼠」という色の名で

て雪の名である。そのいずれにも解説が付されているが、どんな詳しい解説よりは、暮らしのうちに体験した現物にまさるものはない。

「春雨」の説明を百回聞くよりは、春雨の中を一度歩いてみることだ。すると

てのひらを春雨傘の外へ出す

杉本零

の作者が、なぜ掌を傘の外に出したかということや、私の祖母の着物の柄が細い斜線を図案化したものであることなどがわかってくる。

いくら春の風を受けていても、いくら桜が咲いていても、無関心な目には無いも同じだが、かといって春風を受けることや花を見ることなどは、特別に学ぶことではない。子どものころから大人たちの「花が咲いた。」「風が暖かくなった。」という言葉の中で過ごしておれば、大人と同じようにわかってくる。

忙しさを此処に逃れて春風に

星野立子

年々にわが立つ花下も定まれり

相生垣瓜人

なども、なんとなくわかってくるだろう。

春になり春風がふく、暖かくなって花が咲く、という天然自然とつき合っているうちに、この国の四季の変化や、地域ごとの観天望気が身につくとき、先人たちが残してくれた雨の名や風の名が理に適ったものであることをなるほどと思うようになる。

思えば初冬の山村での、「時雨」と書いた最初の人って、

あることも、鈍色という暗い鼠色が不祝儀の色だから明るい銀鼠色がいいということも、大人になって知ったことだったが、「夕立」ではなく「春雨」にしようというところは、祖母と呉服店の店員さんとの会話を聞いたときにわかった。

いくら伝統的な色柄の名があるとはいえ、色見本も柄見本もないところでのこの程度の会話で、祖母の希望にぴったりの着物が出来上がるのだから、特定の言葉を共有するということは魔法みたいだと思った。いくつになってもその魔法がとけず、五十歳になったときに、祖母を真似て懇意の呉服店に「濃いめの枯葉色に霰あられではどうかしら。」と注文してみた。すると、「霰小紋ですわね、いいでしょう。」との返事である。私の場合には、呉服店専用の色見本帳を繰って決めるという段取りになったが、その見本帳を見ると、日常さりげなく使っている色や柄をあらわす言葉が、ことごとく自然の動植物や気象に由来していることがわかる。

色見本帳と同じように「俳句歳時記」を繰ると、いやでも目に入ってくるのが、季節ごとの雨の名、風の名、雲の名、そしてすぐれた気象予報士だったと思うね。」というさりげないわが仲間の一言は、この国の言葉文化を象徴する一言であった。昔々の誰かが、経験則のうちに初冬の山添いの雨がひととき降って止むということを知り、その現象を「時雨」という字に残してくれたのだ。この「突然に発生してパッと止む」という気象現象は、虫時雨、蝉時雨、露時雨、落葉時雨、などの言葉を生み、二倍三倍にふくれて愛誦され続けている。外国人にとっては雑音でしかない虫の音や蝉の声を、雑音ととらえる日本人はいない。

日本を知らない外国人に、日本とはどんな国ですかと問われたとき、何と答えればいいのか、という質問を受けることがある。言いたいことがあまりにも多く、かえって何も言えなくなってしまうのだが、せいぜい「四季の変化によって衣食住が成り立っており、そんな中で使われている言葉のゆたかな国。」ということを根っこにして、それぞれの考えを伝えるよい方法がある。それも特別な人たちの言葉ではなく、普通の人たちが普通に使う言葉が大きな遺産財産であることを言えたいと思う。この国が「言霊ことばたまの幸富国」であることを、誇りをもって言えたい。

宇多 喜代子（うだきよこ）

俳人。一九三五年山口県生まれ。二〇〇二年、紫綬褒章受章。著書に、句集『夏の日』（海風社）『夏月集』（熊野大学出版局）、随筆『わたしの歳事ノート』（富士見書房）などがある。光村図書中学校国語教科書3（平成十八年度版）に、書き下ろし教材「俳句の可能性」を執筆。